

徳川光圀『鎌倉日記』にみる近世鎌倉の観光および景観資源の発掘に関する研究

A Study on the Grasp of Resources about Tourism and Landscape from "Kamakura Nikki"
by TOKUGAWA Mitsukuni

押田 佳子*

Keiko OSHIDA

Abstract: "Kamakura Nikki", a book of a journey on springs of Kamakura" was the travel literature of early modern Kamakura by TOKUGAWA Mitsukuni. They surveyed around all Kamakura about history and architectures, nature, culture, ruins of the Medieval Period of Kamakura, and the like. Then, Mitsukuni and his research companions found resources: tourism resources, landscape resources involve green. Tourism resources are 173 spots in all composition from hearing research and reading research from classical literature as "Azumakagami". Many of them were temples or shrines, others were occupied historic sites, road, tree, and so on. Mitsukuni and his follows were detected landscape resources as effective tools to gain view area and spatial recognition. Green resources were not recognized regional landscape resources but landmarks as spatial perceptions or holy space as "Chinju". Moreover, they surveyed some scene or sequence, and then traditional noted place were put on recorded for coming generations. Conclusion, they led that the symbolic landscape of Kamakura was landform of "yato".

Keywords: Kamakura, tourism resource, landscape resource, KAMAKURA Nikki, TOKUGAWA Mitsukuni, Edo Era

キーワード: 鎌倉, 観光資源, 景観資源, 鎌倉日記, 徳川光圀, 近世

1. はじめに

古都『鎌倉』は、年間1900万人の観光客数を誇るわが国を代表する観光都市である¹⁾。この鎌倉観光の歴史は古く、江戸時代(以降、近世と表す)にまで遡る。

江戸幕府が出来て間もない寛永10(1633)年に五山巡りのために鎌倉を訪れた沢庵和尚の『鎌倉順礼記』によると、鎌倉五山第一位の建長寺に関して「人住まざれば夜は獣のすみかと思えたり(略)尊像もいまは露しづくに潤ふ。後門の方をみれば唐様に刻みなしたる曲几、くずれ埋づみてあれども、誰収むる人もなし」と記しており、当時の鎌倉が荒廃していた様子が窺える²⁾。

このような鎌倉を観光都市に発展させるきっかけとなったのは、徳川幕府が五街道をはじめとする交通網を整備したことに加え、貞享2(1685)年に徳川光圀監修のもと編纂された『新編鎌倉志』³⁾が果たした役割が大ききといわれている。『新編鎌倉志』は、徳川光圀(以下、光圀)が歴史書『大日本史』を制作するにあたり、歴史資料が著しく少ない鎌倉地域を補填するために編纂されたものであり、鎌倉の建築や自然、歴史といった名所旧跡などに加え、他の見どころや特産物などについても掲載している³⁾。この情報量の多さゆえ、『江の島』⁴⁾など後世に執筆された紀行文にも数多く引用されていることから、近世観光の旅行者たちにガイドブックとして携行されていた様子が窺える。

『新編鎌倉志』の刊行に先立ち、延宝2(1674)年に光圀自ら現地調査を実施した調査報告書が『鎌倉日記』であり、一行が実際に訪れた順に紀行文風にまとめられている⁵⁾。記述より、光圀は武家政治の根源をなす中世鎌倉の史料調査に熱心であり、調査の対象は歴史的な出来事に留まらず、その背景となった山河など地域資源に及んでいる。このような光圀の取り組みは、中世以降に継承された鎌倉の観光資源の発掘作業といえ、ここで発掘された資源の多くは現代観光においても重要な意味をもつと考えられる。以上より、『鎌倉日記』は「鎌倉観光発見」に関わる過程において重要な文献であると捉える事ができる。そこで本稿では、『鎌倉日

記』に着目し、その記述より、徳川光圀が鎌倉において見出したことは、現代における観光や景観資源として役立つかどうかを考察することを目的とする。

2. 研究の位置づけ

近世鎌倉観光に関する既往研究についてみると、鎌倉観光最盛期に著名な戯作家・十返舎一九が記した『金草鞋(かねのわらじ)箱根山七温泉江ノ島鎌倉廻』に着目し、観光経路上で一九が用いた景観鑑賞の技法等を検証した研究⁶⁾や複数の紀行文より鎌倉観光を網羅的に捉えた研究⁷⁾がある。これらの研究で扱われた文献資料の筆者の多くは徳川光圀が監修した『新編鎌倉志』を携行しており、この基礎調査資料にあたる『鎌倉日記』から当時の観光資源や景観資源を読み取ることは鎌倉の原風景を理解することにつながり、今後京都や鎌倉などの伝統的な観光地における景観の保全や継承を踏まえた観光都市計画への展開が期待される。

以上の考えを踏まえ、本稿では文献資料より観光都市鎌倉の発見のプロセスを捉えることで、鎌倉が本来持つ観光ポテンシャルを見直すことにつながり、地域らしさを活かした観光まちづくりに寄与することをねらいとしている。

3. 鎌倉の定義

近世の「鎌倉」は領主による封建制度のもと、相模国鎌倉郡として成立していた。この「郡」も領主の交代などによって幾度か領地を改変されている。本研究で対象とする「鎌倉」の範囲は、押田ら^{6) 7)}における定義に従い、近世以降常に「鎌倉」であり続けた地域である、「六浦(現横浜市金沢区)」「固瀬河(現藤沢市)」「小壺(現逗子市)」「小袋坂(現鎌倉市)」を東西南北の境界とした(図-2の白色で示した領域)。

4. 徳川光圀『鎌倉日記』における調査の概要^{8) 9)}

徳川光圀が延宝2(1674)年に鎌倉の史跡を巡検した際の紀行文

*日本大学理工学部

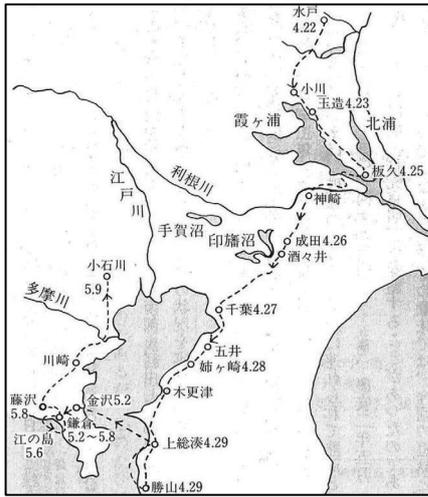


図-1 『鎌倉日記』の足跡(延宝2年4月22日~5月9日)
(鈴木瑛一(2006)『徳川光圀』⁹⁾, pp126より転載)

であり、実際には家臣の吉弘元常らが筆を執ったものといわれている。光圀が歴史書『大日本史』編纂という大事業に取り掛かるにあたり、中世鎌倉に関しては歴史資料がほとんど存在しない状態であった。そのため、武家政治の根源をなす鎌倉幕府時代の研究を余儀なくされ、延宝元(1673)年の帰府(自分の藩から江戸の藩屋敷に戻る旅)に際し藩内巡検を行った後に藩領南部から上総国を経て、上総湊からの船旅で鎌倉へ赴くに至った。

図-1より、一行は鎌倉に延宝2年の5月2~8日までの7日間滞在した後江戸に戻っており、この巡検は光圀の生涯唯一の旅とされている。『鎌倉日記』は、『新編鎌倉志』編纂の予行といえるものであるが、『日記』で指摘しながら『鎌倉志』で言及してい

表-2 『鎌倉日記』掲載地点の分類(数字の単位は地点)

分類	地点数	分類	地点数
社寺	63	川	3
旧跡	38	切通	3
谷	13	地藏	3
地名	11	石塔	2
坂・道	8	石・岩窟	2
山	8	樹木	2
橋	6	池	1
海岸	5	瀆	1
井戸	4	合計	173

ない事項もあり、現地における生情報として貴重な記述も数多くみられる。これは巻末に「凡ソ此等ノ事、郷導ノ教ニ任セ、見聞ニシタカヒテ草々シク書トメヌ」と記しているように、『日記』の記述方針が僧侶など現地の案内人の説明による所が多いからであろう。また、この調査において『東鑑』や『太平記』など32文献¹⁰⁾も参考文献が引用されていることも特徴として挙げられる。

なお、上記の手法で取りまとめられた『鎌倉日記』には、一行が辿った名所・旧跡順にいわれや名物、社寺の場合は宝物などの記載だけでなく、日記以外の記録・鐘銘などを別紙に写したものと地図もあったとされているが、その所在は不明とされている⁹⁾。

5. 観光資源の発掘

『鎌倉日記』に掲載された調査対象およびその状況を表-1に示す。表-1より、対象地内で掲載された観光対象は全173地点であり、これらを5月2日~7日の6日間で巡っていた。この期間に光圀一行は、5日が最多の61地点(うち鶴岡八幡宮は再訪問)、次いで6日が47地点、3日が25地点、7日が24地点、2日が11地点と鎌倉内を精力的に巡っており、雨天で足止めされた5月4日のみ6地点に留まっていた。

表-1 『鎌倉日記』における調査対象およびその状況(数字は『鎌倉日記』内の掲載順序を示す。)

日付	No.	地名	分類	引用			現地調査	日付	No.	地名	分類	引用			現地調査
				伝承・古事草	和歌・佳句	文獻名						伝承・古事草	和歌・佳句	文獻名	
5/2	1	瀬戸明神	社寺	○		開き取り	5/5	58	サン堂	旧跡					
	2	鎌倉寺	社寺	○	徒然草、他4			59	獅子谷	山	○				
	3	龍泉寺	社寺	○				60	瑞泉寺	社寺	○				
	4	光輪寺	社寺	○	縁起			61	鶴岡八幡宮	社寺	○		情報訂正		
	5	塩釜地蔵	地藏	○				62	杉本親吉	社寺	○	東鑑			
	6	五大堂	社寺	○	東鑑			63	大羽谷	谷	○				
	7	権原屋敷	旧跡	○				64	衣張山	山	○				
	8	馬冷場	池	○				65	頼国寺	社寺	○	東海道名所記			
	9	持氏屋敷	旧跡	○		情報訂		66	清川	川	○	太平記			
	10	佐々木屋敷	旧跡	○				67	浄妙寺	社寺	○	旧蹟日記			
	11	英勝寺	社寺	○	縁起			68	鎌足大明神	社寺	○	万葉集、他4			
	12	源氏山	山	○				69	十二郷谷	谷	○				
	13	泉谷	谷	○				70	胡桃谷	谷	○				
	14	扇井	井戸	○	東鑑、太平記			71	中谷	切通	○				
	15	大友屋敷	旧跡	○				72	大御堂谷	旧跡	○	東鑑			
	16	藤谷	谷	○				73	歌橋	橋	○				
	5/3	17	飯盛山	山	○				74	文覚屋敷	旧跡	○			
18		阿仏屋敷	旧跡	○			75	屏風山	山	○					
19		若岩寺	旧跡	○			76	扇山屋敷	山	○	東鑑				
20		尾屋敷	旧跡	○			77	寺谷	社寺	○	旧蹟				
21		ホウセン寺旧蹟	旧跡	○			78	藤島谷	谷	○					
22		青香寺谷	旧跡	○			79	塔辻	坂・道	○					
23		黒清館	岩窟	○			80	大町小町	地名	○					
24		山王堂跡	旧跡	○			81	妙隆寺	社寺	○					
25		掃磨屋敷	旧跡	○			82	妙隆寺	社寺	○					
26		六国見	山	○			83	大行寺	社寺	○					
27		六本松	樹木	○	曾我物語		84	本覚寺	社寺	○					
28		化粧坂	坂・道	○			85	妙木寺	社寺	○					
29		葛原岡	旧跡	○			86	田代屋敷	旧跡	○					
30		梅谷	坂・道	○	夫木集		87	田代親吉	社寺	○					
31		武田屋敷	旧跡	○			88	辻薬師	社寺	○					
32		海蔵寺	社寺	○			89	乱橋	橋	○					
5/4		33	浄光明寺	社寺	○	塚裏抄		90	材木座村	地名	○	徒然草			
	34	綱引地蔵	地藏	○			91	丁字谷	谷	○					
	35	藤石塔	石塔	○			92	紅谷	谷	○					
	36	藤石塔	石塔	○			93	櫻谷	谷	○	東海道名所記				
	37	鶴岡八幡宮	社寺	○	東鑑、他1	開き取り	94	補陀瀧寺	社寺	○					
	38	鎌倉	地名	○			95	五川橋	橋	○					
	39	鎌倉親吉	社寺	○			96	光明寺	社寺	○					
	40	志一人ノ石塔	石塔	○	太平記		97	道寸城	旧跡	○	北条五代記				
	41	日金山	社寺	○			98	荒井間屋	社寺	○					
	42	岩不動	社寺	○			99	黒政石塔	旧跡	○					
	-	鶴岡八幡宮(再)	社寺	○			100	下若宮	社寺	○					
	43	鳥合七原	旧跡	○	東鑑		101	裸地蔵	地藏	○					
	44	頼朝屋敷	旧跡	○			102	扇山石塔	旧跡	○					
	45	土下	旧跡	○			103	異荒神	社寺	○					
	46	頼朝寺	旧跡	○			104	人丸墓	旧跡	○					
	47	永福寺	旧跡	○			105	興禪寺	社寺	○					
	48	西御門	地名	○			106	無量寺谷	谷	○					
5/5	49	高松寺	社寺	○			107	法性寺	旧跡	○	東鑑				
	50	采蓮寺	社寺	○			108	千葉屋敷	旧跡	○					
	51	法華堂	社寺	○			109	諏訪屋敷	旧跡	○					
	52	東御門	地名	○			110	佐介谷	谷	○	東鑑				
	53	埴橋天神	社寺	○		情報不	111	蔵許橋	橋	○					
	54	天台山	山	○			112	天狗堂	社寺	○			開き取り		
	55	大栗寺	社寺	○			113	観音谷	社寺	○					
	56	覚園寺	社寺	○	旧蹟	開き取り	114	鶴岡山王	旧跡	○					
	57	大塔宮土籠	石窟	○			115	笹目谷	谷	○					
	5/6	116	塔辻	旧跡				117	成久首座	旧跡					
		117	成久首座	旧跡				118	甘鏡明神	社寺			東鑑		
		118	甘鏡明神	社寺				119	水無瀬ノ川	橋	○	○	万葉集、他2		
		119	水無瀬ノ川	橋	○	○		120	大梅寺	社寺	○				
		120	大梅寺	社寺	○			121	大仏	社寺	○	○	東鑑、他2		
		121	大仏	社寺	○	○		122	御興嶽	山	○				
		122	御興嶽	山	○			123	長谷親吉	社寺	○				
		123	長谷親吉	社寺	○			124	御堂堂	社寺	○				
124		御堂堂	社寺	○			125	星月夜井	井戸	○	○				
125		星月夜井	井戸	○	○		126	虚空蔵堂	社寺	○					
126		虚空蔵堂	社寺	○			127	極楽寺	社寺	○		旧蹟			
127		極楽寺	社寺	○			128	月影谷	谷	○		十六夜日記			
128		月影谷	谷	○			129	霊山崎	海岸	○					
129		霊山崎	海岸	○			130	針産橋	橋	○					
130		針産橋	橋	○			131	音無瀆	瀆	○	○				
131		音無瀆	瀆	○	○		132	福村崎	海岸	○	○				
132		福村崎	海岸	○	○		133	袖浦	海岸	○	○				
133	袖浦	海岸	○	○		134	一人塚	旧跡	○						
134	一人塚	旧跡	○			135	七里ノ浜	海岸	○						
135	七里ノ浜	海岸	○			136	金洗沢	川	○						
136	金洗沢	川	○			137	藤根村	地名	○		巖本辰ノ縁起				
137	藤根村	地名	○			138	万福寺	社寺	○						
138	万福寺	社寺	○			139	袈浦	海岸	○	○	夫木集				
139	袈浦	海岸	○	○		140	竜口寺	社寺	○						
140	竜口寺	社寺	○			141	竜口明神	社寺	○						
141	竜口明神	社寺	○			142	片瀬川	川	○	○	東鑑				
142	片瀬川	川	○	○		143	笈松	樹木	○						
143	笈松	樹木	○			144	唐原	地名	○	○	夫木集				
144	唐原	地名	○	○		145	江嶋	地名	○	○	海道記、他1				
145	江嶋	地名	○	○		146	社戸	地名	○		情報不足				
146	社戸	地名	○			147	小森村	地名	○						
147	小森村	地名	○			148	龍浦	地名	○						
148	龍浦	地名	○			149	飯島	地名	○						
149	飯島	地名	○			150	亀井坂	坂・道	○						
150	亀井坂	坂・道	○			151	長壽寺	社寺	○						
151	長壽寺	社寺	○			152	信願屋敷	旧跡	○						
152	信願屋敷	旧跡	○			153	堀田屋敷	社寺	○						
153	堀田屋敷	社寺	○			154	神宮寺	社寺	○						
154	神宮寺	社寺	○			155	浄知寺	社寺	○						
155	浄知寺	社寺	○			156	松岡山	社寺	○						
156	松岡山	社寺	○			157	門覚寺	社寺	○						
157	門覚寺	社寺	○			158	建長寺	社寺	○						
158	建長寺	社寺	○			159	地蔵坂	坂・道	○						
159	地蔵坂	坂・道	○			160	小安坂	坂・道	○						
160	小安坂	坂・道	○			161	聖天坂	坂・道	○						
161	聖天坂	坂・道	○			162	佐竹屋敷	旧跡	○						
162	佐竹屋敷	旧跡	○			163	安養院	社寺	○	○	旧蹟	情報不足			
163	安養院	社寺	○	○		164	花谷	切通	○		沙石集				
164	花谷	切通	○			165	妙法								

表-2に鎌倉の観光対象の分類を示す。表-1に掲載する地点名を現在の観光地や地名を参照し、社寺、旧跡、地名などに17分類した。その結果、社寺が63地点と最も多く、次いで旧跡が38地点であった。このうち旧跡の多くは、「86 田代屋敷」の「田代ノ観音ノ北ノ前ナル島也。」と記述されるように、荒地の状態で見えられており、中世以降廃れたまま放置されている状態が垣間見えた。また、谷が13地点と3番目に多くみられたことについては、鎌倉が谷戸地形を有する独特の地形が反映されているといえる。

表-1より、調査状況に着目すると、各観光対象に関する伝承・古事の記載は「1 瀬戸明神」をはじめ104地点で見られ、全体の約6割を占めていた。新古今集等などからの和歌・俳句の引用は13地点、引用文献名を記したものは40地点であった。中でも『東鑑』は「5.五大堂」など12地点の説明で引用されており、中世武士の歴史を読み解く上で大変重要であったことが窺える。

基本的に全ての地点に対し文献資料に基づく現地調査がなされているが、「9 持氏屋敷」と「61 鞍阿弥陀」では文献の情報に誤りがあったため記述を訂正しており、「1 瀬戸明神」や「36 寿福寺」など4地点、住職や地元住民への聞き取りを行い、さらなる情報収集を行っていた。このように各地点で綿密な調査が実施された一方で、「53 荏柄天神」の「然トモ祝融ノ災度々ニシテ記録伝ハラズ。文献徴トスベキナシト云。」にあるように、情報不足であるものも3地点みられた。

また、「158 建長寺」は「五山ノ第一」、「153 明月院」は「十刹ノ第一」、「68 鎌足大明神」は「鎌倉谷七郷、鎌倉七口」と説明がなされており、新旧の定数名所についても簡単に記載されていた。特に鎌倉五山¹⁾についてはその由来故、寺宝を隈なく調査しているが、表-1の「158 建長寺」に「昔ノ跡トテ今モ猶実ニ五山トオボシキハ円覚・建長ノ二寺ノミ。」とあり、必ずしも良好な状態で維持されていなかったことが捉えられる。

以上のように、『鎌倉日記』に掲載された調査対象地の多くは、社寺や旧跡が多くを占めていたことが明らかとなった。当時の鎌倉は、建長寺や荏柄天神の記述にみられるように、由緒ある社寺においてすら幕府崩壊後の鎌倉は廃れるがまま荒地の状態であったことより、中世から近世に至る約300年の時間経過ならびに資料不足は、光圀の調査を難航させたと考えられる。

一方で、文献と現地踏査によるきめ細かな調査により、位置関係やいわれは概ね解明されただけでなく、多くが現代においても観光地として継承されていることより、光圀一行の調査は、現代観光における発掘作業として位置づけられるといえよう。

6. 景観資源の発掘

光圀一行は現代にとっては観光資源になるものを短期間で多数抽出するにあたり、効率的な移動を余儀なくされたと考えられる。そのため、巡検の過程において観光対象にかかわる景観や周辺緑地は空間認識のために必要不可欠なものであったと考えられる。

上記の考えのもと、『鎌倉日記』における景観観賞に関する記載を表-3、緑地に関する記述を表-4に示し、以下で考察する。

(1) 景観観賞の場の発掘

表-3より景観観賞に関する記載は11地点で14件みられ、これらは視点場と視対象との関係などから、山なみを見渡す「眺望景観」が4件、山頂より鎌倉の街なみを見下ろす「俯瞰景観」が2件、海面とそれに付随する景観を愛でる「海岸景観」が6件、寺社の庭園を讃える「庭園景観」が2件、が抽出された。

図-2に示すように景観観賞に関する記載の多くは「37. 鶴岡八幡宮」付近の高台に集中しており、眺望景観または俯瞰景観に適した立地であることが捉えられる。

分類ごとの傾向をみると、眺望景観は、「3. 能見堂」の「此地ヨリ上下総、房州、天神山、鋸山等海上ノ遠近ノ境地」のように高所から遠方の山並みを見渡した物と、「145. 江嶋」の「其上ニ座して四方を眺望するに」のように、低地から水平に遠方を捉えたものとがみられた。特に、「3. 能見堂」は「絶景也ト云。」とあるように、絶好の視点場であったことが捉えられる。

俯瞰景観は、視点場が高台にあったと考えられるが、「72 大御堂谷」の「鎌倉中ノ勝地ヲ見、御所ノ南ノ山ノ麓ニ勝タル地形アリ。」にあるように、鎌倉の中心地を眺める高さであったと考えられる。

海岸景観のうち3件は「145 江嶋」に関連しており、トツテガ崎や高級宿屋である岩本院を視点場とし、「土峯ノ雪筵ヲ照シ、海波森漫トシテ無限風光ナリ。」にみられる、海面とその後背との関係を愛でている様子が捉えられた。また、「146 杜戸」においても、「(南の海上の名嶋を望み)折シモタ陽波ニ浮ンデ日ヲ洗フガ如シ。」とあり、殊更波の移ろいが好まれていた様子が捉えられた。

庭園景観は、「158 建長寺」の「昔ノ跡トテ今モ猶実ニ五山トオボシキハ円覚・建長ノ二寺ノミ。境内広ク、山潤林岡樹木鬱々タル勝地」にみられるように、調査時に庭園が良好な状態で維持されていた庭園に限られていたことが捉えられた。

以上のように、光圀一行は視点場と視対象との関係に応じて、景観観賞の場における景観を堪能していた様子が捉えられ、特に「145 江嶋」は島内の様々な場所が視点場となる可能性を示唆したといえる。視対象についても、遠方への眺望、鎌倉全体への眺望と様々なスケールを扱っており、一方が道中において鎌倉の地形を理解しながら発掘していったと考えられる。

(2) 緑地景観資源の発掘

表-4より緑地に関する記載は23地点で29件みられ、これらは単木20件、森林9件に分類される。

分類別々に傾向をみると、単木はマツが12件と圧倒的に多く、他はイブキ(文中ではビヤクシンと表記)が3件、イチョウ、スギ、クスノキ、サクラ、カエデ、ウメがそれぞれ1件であった。単木の多くは、「1. 瀬戸明神」の「社ノ左ニ大ナ古木の柏楨アリ。里民蛇柏楨ト云。金沢八木ノ一也。」や「3. 能見堂」の「堂ノ前ニ筆捨

表-3 景観観賞の場に関する記載状況(数字は表-1に対応する。)

	No.	地点名	種類	景観
眺望景観	3	能見堂	社寺	此地ヨリ上下総、房州、天神山、鋸山等海上ノ遠近ノ境地、(略)絶景也ト云。
	26	六国見	山	従是安房・上総・下総・武蔵・相模・伊豆ノ六ヶ国能ク見ユル。
	71	中谷	切通	釈迦堂谷トモ云フ。雪下ヘ帰ル海道ヨリ名越ノ眺望ス。
	145	江嶋	地名	(魚板岩にて)其上ニ座して四方を眺望するに(略)、豆駿。
俯瞰景観	27	六本松	樹木	駿河次郎清重ガ此所ニ泊リ、鎌倉中ヲ見タル旧跡トソ
	72	大御堂谷	旧跡	鎌倉中ノ勝地ヲ見、御所ノ南ノ山ノ麓ニ勝タル地形アリ。
海岸景観	97	道寸城	旧跡	此所ヨリ飯嶋ナドヲ望ミテ由比濱ヲ帰ル。
	145	江嶋	地名	(トツテガ崎より)豆州ノ大嶋等見ユル。城ガ嶋ノ北ニ見タル八見崎、其北ヲ荒崎ト云。
	145	江嶋	地名	(巖本院より)土峯ノ雪筵ヲ照シ、海波森漫トシテ無限風光ナリ。
	145	江嶋	地名	(巖本院より)多景ニヒカレ、シバシバ歪ヲ傾ク。
	146	杜戸	地名	(南の海上の名嶋を望み)折シモタ陽波ニ浮ンデ日ヲ洗フガ如シ。
	148	鷺浦	地名	片浜ニテ景地ナリ。
庭園景観	153	明月院	社寺	庭除ノ風景殊ニ勝レタリ。
	158	建長寺	社寺	昔ノ跡トテ今モ猶実ニ五山トオボシキハ円覚・建長ノ二寺ノミ。境内広ク、山潤林岡樹木鬱々タル勝地庭除多景也。

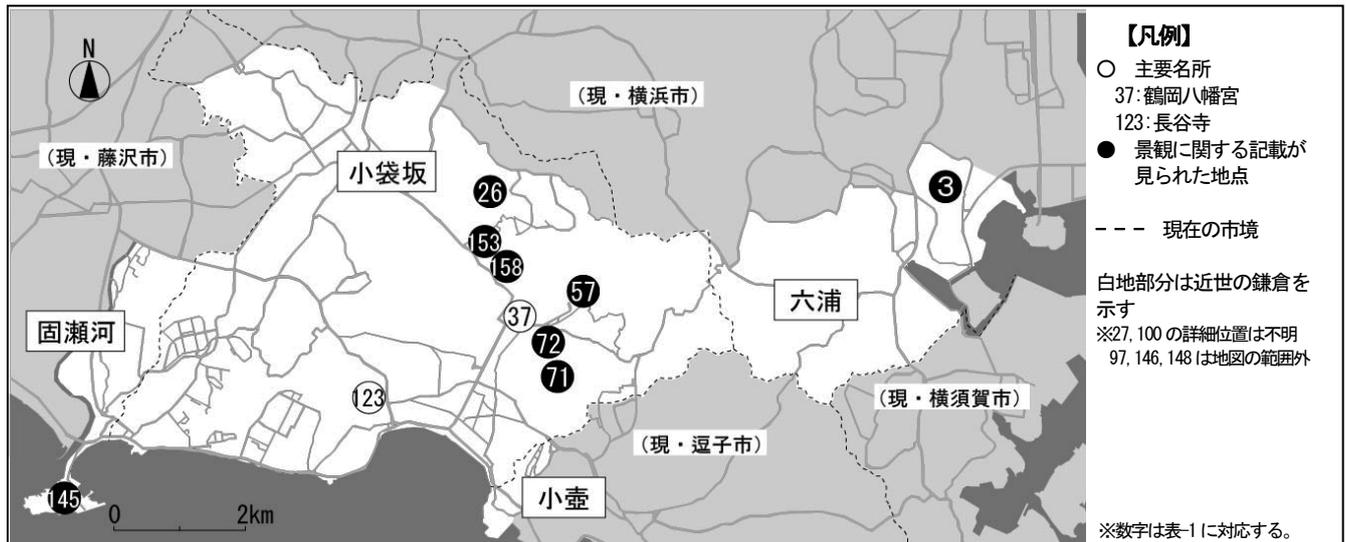


図-2 景観に関する記載が見られた地点の分布

表-4 緑地に関する記載状況 (数字は表-1に対応する)

No.	地点名	種	緑地に関する記述
1	瀬戸明神	イブキ	社ノ左ニ大ナ古木の柏横アリ。里民蛇柏横ト云。金沢八木ノ一也。(略)此辺ニ柏横ノ大樹多シ。
2	称名寺	サクラ、カエデ、ウメ	西湖梅・普賢桜・青葉楓・桜梅ノ四本ハ、昔ノヒコバトテ小木ニテ、此堂ノ前庭ニアリ。
3	能見堂	クスノキ	神木トテ大楠ノ大樹アリ。
27	六本松	マツ	堂ノ前ニ筆槍松ト云一株有リ。又二本アル松ヲ夫婦松ト云。
37	鶴岡八幡宮	マツ	六国見ノ西ニ二本アル松ヲ云。
64	衣張山	マツ	神宮寺ノ前ニ松一本有。公院ガ裏朝ヲ殺セシ鎮守樹(略)社ノ後ロニ大杉五本一株ヨリ生出タリ。彼比所ニ比丘尼寺アリシニ、(中略)今上ノ山ニ松ノ大木二本アルヲ云ト也。
78	葛西谷	マツ	上ノ山ニ琴引ノ松ト云アリ。
89	乱橋	不明	橋ノ西ニ連理ノ木アリ。
121	大仏	マツ	大仏ヨリ右ノ方ニ盛久ガ松ト云ニアリ。
127	極楽寺	マツ	入口ニ弁慶ガ腰カケ松アリ。
137	慶越村	マツ	海中ヘ指出タル松アリ。
138	万福寺	マツ	弁慶申状ヲ書テ(略)池升ニ松アリト云。
146	社戸	イブキ	社ノ北ニ飛鶴松ト云樹アリ。
158	建長寺	イブキ	社ノ西ニ千貫松、同ク南ニ腰懸松ト云(略)
173	法性寺	マツ	開山堂ノ前ニ舍利樹ト云木アリ(略)其上ニシルシノ木トテ大ナル松アリ。
35	藤為根石塔	-	茂林鬱々タリ。
68	鎌足大明神	-	西ノ岡ニ林アリ。即チ浄妙寺ノ鎮守トナシテ(略)
74	文覚屋敷	スギ	杉森アリ。
103	真荒神	スギ	杉森ノ内ノ堂ヲ云。
110	左介谷	マツ	西方岡辺ノ松森ハ(略)
118	甘縄明神	-	海道ノ北ニ重森アル所也。(鐘樓ガ)高い林ノ中ニ懸リタリ。
157	円覚寺	-	円覚寺ヲ出テ南行シテ、第六天ノ森ヲ見ル。(略)海道ヨリ西ニ有森ナリ。
172	御猿場山王	マツ	小山ニ松少シ有テ云。

松ト云一株有リ。」のように固有名詞で記載され、地域や社寺を代表する緑地景観資源として位置付けられたといえる。一方、「27六本松」の「六国見ノ西ニ二本アル松ヲ云。」にみられるように、単木はランドマークの役割も果たしていたと考えられ、全体的に成長が早く樹形がまっすぐな針葉樹が認識されやすかったことが窺える。森林では、「74文覚屋敷」の「杉森アリ。」のように樹種が明らかにされているものはスギ、マツの純林に留まっており、他は「118甘縄明神」の「海道ノ北ニ重森アル所也。」のように社寺などを含む樹木の集団として認識されていた様子が捉えられた。また、「68鎌足大明神」には「西ノ岡ニ林アリ。即チ浄妙寺ノ鎮守トナシテ」と記載されており、浄明寺全体が「鎮守の森」としてすでに認識されていたことが捉えられた。

以上のように、緑地景観資源は御神木や路傍樹のような地域資源としてだけでなく、空間認識のためのランドマーク、または「鎮守」の表現にあるように社寺を含む神聖な空間として認識されていたため、光岡たちによって発掘される結果となったとみられる。

7. おわりに

本研究では、徳川光岡によって編纂された調査報告書かつ紀行文の『鎌倉日記』からの読み取りより、鎌倉の景観といえるもの

や観光資源になるものを把握できた。

景観は対象そのものの美しさよりも、視点場と視対象との関係より捉えた眺望領域を記載する傾向が捉えられた。また、緑地景観資源は御神木や路傍樹のような地域景観資源としてだけでなく、空間認識のためのランドマーク、または「鎮守」の表現にあるように社寺を含む神聖な空間として認識されており、このような一行が現地の捉え方が結果として後世の観光対象における発掘へと繋がったとみられる。

光岡らが発掘した観光資源のうち、社寺に関連する項目や海岸眺望については、光岡以降の著名人などの手を経て、現代の鎌倉においても継承されており、現代の鎌倉観光に大いに貢献しているといえる。これは、鎌倉幕府崩壊後300年余りに及ぶ歴史的空白から、観光および景観資源を発掘した光岡らの成果といえ、今後も貴重な地域資源として継承されることであろう。

謝辞：本研究の資料とりまとめに際し、日本大学理工学研究所不動産科学専攻の瀬畑尚紘氏にご協力いただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) 鎌倉市観光課：平成22年入込観光客数：鎌倉市ホームページ <<http://www.city.kamakura.kanagawa.jp/kisyu/data/2011/20110511.html>> , 2011.5.11更新, 2011.9.2参照
- 2) 沢庵采彰(1633)：鎌倉順礼記。鎌倉市史近世近代紀行地誌編、吉川弘文館、5-24pp
- 3) 鈴木一夫(1990)：水戸黄門紀行：保育社、11-12 pp
- 4) 大島完来(1805)：江の島、鎌倉市史近世近代紀行地誌編、吉川弘文館、271-278pp
- 5) 徳川光岡(1674)鎌倉日記。鎌倉市史近世近代紀行地誌編、吉川弘文館、28-105pp
- 6) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀(2010)：十返舎一九「金草鞋を通じてみた」近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその観賞形態に関する研究、ランドスケープ研究73(5)、519-522 pp
- 7) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀・瀬畑尚紘(2011)：紀行文より捉えた近世鎌倉における観光経路および滞在拠点の成立過程に関する研究、ランドスケープ研究74(5)、431-436 pp
- 8) 鈴木瑛一(2006)：徳川光岡、吉川弘文館、123-131 pp
- 9) 鈴木棠三(1976)：鎌倉古絵図・紀行-鎌倉紀行編、東京美術、121-124 pp
- 10) 万葉集、類聚和歌抄、詞林采葉、東鑑、太平記、徒然草、野槌、長明御道記、発心集、沙石州、続古今和歌集、新拾遺倭詞集、夫木集、類聚名所和歌、鶴岡記、鎌倉五山記、鎌倉物語、鎌倉順礼記、鎌倉記、鎌倉集書、鎌倉覚書、関東兵乱記、寺社頭員数記、大友興院記、王代一覧、日本事跡考、神社考、塔囊抄、節用集、關前遊記行、道春丙辰紀行、東海道名所記の計32文献を指す。
- 11) 鎌倉五山とは、建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺の五寺を指す。